

【天気予報】

期間の前半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

	平均気温 (°C)	最高気温 (°C)	最低気温 (°C)	降水量 (mm)
2014年	26.4	30.9	22.7	125.5
2015年	25.7	29.7	22.6	194.5
2016年	27.4	31.9	23.7	44.0
1981~2010年	26.6	30.6	23.4	174.6

※気温については、1ヶ月の平均値

【作物】水稲

1 水管理

- 分げつ開始後の水管理：気温の上昇で、土壌中有機物の分解が進み、根腐れの原因となるガスが発生し、生育(分げつ)が抑制されることがあります。初期生育が安定したら、土壌中のガスを放出するため、一度落水し、根に酸素を供給するようにして下さい。用水が不足する場合は、極浅水にして下さい。
- 中干し：必要茎数(約18~20本/株)が確保され次第、足跡が軽くなる程度に行います。中干しの目安は約7~10日間で、圃場により土の乾き具合が異なるため、土壌条件に応じて連続または間断での中干しをして下さい。

2 病害虫防除

田植時に「フルターボ箱粒剤」を使用した場合は、出穂期まで防除効果が期待できますが、水稲の生育状況や病害虫の発生状態をよく観察して病害虫防除を行って下さい。

3 雑草防除

除草剤散布後、生育中に残草(広葉雑草・多年生雑草等)が多い圃場は、中・後期剤(バサグラン液剤500mlを100lの水に希釈)で雑草防除を行って下さい。

<山橋>

【野菜】

草勢維持のために、以下のことに注意して管理して下さい。

1 マルチング

梅雨明け後は日射量が増大し、高温・乾燥状態が続くため、地温上昇抑制・土壌水分の維持・雑草抑制等を目的に、畝上に敷き草等を厚めに敷いて下さい。

2 追肥

果菜類は収穫最盛期を迎えるため、肥切れさせないように施用します。追肥は7~10日間隔で、1回当たり、しあわせ化成等の化成肥料を1kg/aを目安として施用します。粒状肥料の場合、追肥を行っても乾燥した土壌では肥料が効きにくいので、灌水と併せて行って下さい。

3 整枝・摘心・摘葉

長期間安定的に収穫するためには、適宜、整枝を行なうことが大切です。主枝が目標の長さになったら、先端を止めます。

また、果実の肥大促進や側枝の伸長を促すために、適宜、摘葉を行い、果実及び新芽に光があたるようにします。

(1) きゅうり

親蔓が30節程度になると摘心し、親蔓の15節前後の子蔓を力枝として伸ばします。それ以外の子蔓は、2節で摘芯。孫蔓は放任とし、込み合った蔓を適宜除去します。(草勢を維持するため、常に動きのある芽先を4本程度確保します)

(2) トマト

腋芽を芽かぎし、主枝1本立てとします。5段果房の上の葉を2枚残して、主枝を摘芯します。果房を覆う葉は半分程度に切除し、果実に光を当てるようにします。

(3) なす

強い枝3本を主枝とし、主枝から出てくる子枝は、花の上の葉を1枚残し摘芯します。

収穫時に枝の元1節残して切り返します。残した節から新たに発生した芽についても花の上の葉1枚残して摘心することで3本の主枝に良く光が当り、色艶の良い果実が収穫できます。

4 摘果

草勢維持を図るために、不良果を中心に摘果を行い着果負担を軽減して下さい。特にキュウリでは、低い曲がり果等を早めに摘果することで茎葉

の伸長が良くなり、次の着果促進のため、積極的に実施して下さい。
<越智>

【栗】

今月になると、新梢伸長量や着量量などから、作柄の予想ができます。安定生産のためにも以下の点に留意し管理作業を行って下さい。

1 夏肥の施用

6月中旬~下旬が夏肥の施用時期です。毬果肥大を促すために必要な肥料ですので、施用していない園地では早急に施用して下さい。また、事前に除草作業を行い、肥料が効果的に吸収されるようにします。目標収量400kg/10aの場合は成分量で、窒素4kg/10a、りん酸2kg/10a、加里5kg/10aです。

2 病害虫防除

(1) クリイガアブラムシ

毬果のトゲの基部に寄生して、吸汁加害し落果させます。今月も毬果への寄生が続くため、7月中旬までに、アドマイヤー水和剤1,000倍、エルサン乳剤1,000倍等を散布して下さい。

(2) シロスジカミキリ

6月になると、樹の主幹部に円形の傷が見かけられるようになります。これが産卵痕です。早めにトラサイドA乳剤200倍を樹幹部に十分散布するか、傷の1cm程度上を木槌で軽く叩いて卵をつぶします。上手くいかなかった場合は、産卵痕付近から木屑が出てくるので、針金などを差し込んで幼虫を駆除して下さい。

(3) 実炭疽病

樹体の枯れ込み、枯れ枝が病原菌の発生源となります。6月中旬~8月までの間にベンレート水和剤2,000倍を2~3回散布して下さい。

<菊池>

【花き・花木】シキミの管理

夏期は害虫の発生期です。お盆の需要期に向け病害虫防除を徹底して下さい。

1 フシダニ

4~9月にかけて、成幼虫が展開直後の柔らかい新葉や新梢を吸汁し、葉にウイルス病的な輪紋症状やモザイク症状が出現します。成幼虫は体長0.1~0.3mm、淡黄色~橙色で群生します。

2 たんそ病

葉の縁から褐色の不定形病斑が形成されます。激発するとほとんど落葉します。5~8月に発生が多くなります。

3 防除

定期防除として6月下旬~7月上旬に、殺菌剤のベンレート水和剤2,000倍、殺虫剤のオルトラン水和剤1,000倍、ダニ剤のピラニカEW1,000倍を混用散布して下さい。散布は、高温時を避けて涼しい時間帯に行って下さい。薬剤は葉裏にかかるよう、ていねいに散布して下さい。

<日野>

【茶】

1 二番茶後のせん枝

二番茶後のせん枝は、炭そ病、もち病の発生抑制と翌年の一番茶の芽数増に効果があります。摘採面から3~5cmの深さで浅せん枝を行いましょ。

せん枝時期が遅くなると、秋までの生育期間が短くなるため、二番茶摘採後7~10日経過した頃を目安に、遅れ芽の出揃いを観察しながら行います。

2 堆肥の施用

二番茶後のせん枝が終わったら、家畜ふん堆肥を1トン/10a程度施用します。堆肥が完熟でない場合は、地表に施しておいてから、深耕の時に打ち込むようにします。

3 除草とミノムシの捕殺

雑草が繁茂すると幼木の生育が阻害されるので、早めに除草を行うとともに、ミノムシを捕殺して下さい。

4 幼木園の干ばつ対策

定植1・2年目の幼木は根域が浅く、うね間も広いので、夏の干害を受けやすくなります。敷草などを行い、地温の上昇を防ぎ、土壌水分の保持に努めましょう。

<日野>